

《解説》

(ハイパーリンクは、並べ替え後の文についています。)

Of all these ^{色々な} varied cases, ^{しかしながら} however, I cannot ^{思い出す} recall any which ^{提示する} presented more ^{奇妙な} singular ^{特質性質} features than that which was ^{関連付ける} associated with the ^{よく知られた} well-known ^{州の名前} Surrey family of the Royslotts of Stoke Moran.

わかりにくいかと思しますので並べ替えて、省略されている語句を補います。

^{しかしながら} However, I cannot ^{思い出す} recall any (case out) of all the ^{色々な} varied cases which presented more singular features than that which was associated with the well-known Surrey family of the Royslotts of Stoke Moran.

頭から訳していくと、

『(変わった事件がたくさんあるといった) けれども、私は思い出すことはできない、どんな事件をも、色々な事件の中でも、(その事件が) 提供するより一層奇妙な特質を持った事件を、よりも、よく知られたサリー州の名門であるストウクモランのロイロットが関連した事件。』

(うーん、むしろ分かりにくくなってしまったような、、、)

でも、整理すると、

『(変わった事件が数あるとは言った) けれども、サリー州のストウクモランのロイロットが関連した事件以上に奇妙な事件を思い出すことは出来ない。』

要するに、『ロイロットの一件が一番奇妙な事件だったなあ。』と言っているわけです。

1. 色々な “vary” が “変化する”。

“varied” が “変化した” ⇒ “色々な”

派生語として“variety” があります。テレビで言う、“バラエティー番組”の
“バラエティー”ですね。

([Home](#) で戻る)

2. 思い出す recall 今回は“思い出す”ですが、同じ単語を“呼び戻す”とか“回収する”という意味で使うこともあります。

『〇〇社（自動車会社）〇〇万台リコール』なんていうニュースが時々
出ますが、この“リコール”がそれ。

([Home](#) で戻る)

3. which これも関係代名詞。（奇妙な特質を提示するような）事
件と言っています。

([Home](#) で戻る)

4. 提示する presented “present” （プレゼント）と聞くと、誕生日やクリスマスの
プレゼ

ントを思い起こしますが、ここで使われている“present”は“提示する”
という意味です。

“presentation”（プレゼンテーション）という言葉聞いたことはありませんか？
それは、この“提示する”という意味の“present”の名詞形です。

もう一つ、“present”には、“今”“現に”“存在する”といった意味もあります。

先生が出席を取っているとき、『出席しています』という意味で、日本

では『はい。』と返事をしますが、英語国では“I am present.” または単に“present”と言います。

([Home](#) で戻る)

5. singular ^{奇妙な} 『似た単語は知っていますか？』と聞かれたら、『“single”です。』とお答えになると思います。

そうなんです。

“single” は“一つの”。

“singular”は “一つしかない”⇒“珍しい”⇒“奇妙な”“非凡な”です。おそらく英語がを始めた頃に投げ出されなくなる理由の一つが“単数形”と“複数形”。“singular”には、その“単数形”という意味もあります。ついでに言えば“複数形”は“plural”です。

([Home](#) で戻る)

6. features ^{特質 性質} この場合は“事件”の特異性の事を言っていますので、“特質”ですが、単に“形、形状”の事をいう場合もあります。

([Home](#) で戻る)

7. that の使用法の一つで、この場合は、“feature”を受けて、“特質”の事です。

英語表現では同じ言葉を使うことを避けるのが一般的です。

『東京の人口は大阪の人口より多い。』を英語で言うと

“The population of Tokyo is larger than the population of Osaka.”

“the population”が繰り返されているので、それを避けて

“The population of Tokyo is larger than that of Osaka.” と

言うのですが、この“that”と同じ用法です。

([Home](#) で戻る)

8. 関連付ける 二度目の登場“associated”です。

この単語の名詞形が“association”で“協会”です。

ちょっと不思議なのですが、この“association”が“サッカー”の語源。

英語で“サッカー”は“foot ball”。『フットボール協会』の『協会』

(“association”) から“soccer”と言われるようになったのだそうです。

英語でサッカーと言っても通じますが、アメリカでは単に“foot ball”という
とアメフトと誤解する人が多いかも。

([Home](#) で戻る)

9. よく知られた “well-known” (良く) “known” (知られた (know の過
去分詞で受身))) 。

英語表現は日本語と順番が逆になっていることが多いのに、このよう
に語順が同じになることもあるのが面白いですね。

“well-過去分詞”の表現でよく使われるのは、“well-done”です。

ステーキを注文すると、ウェイターが “How do you like it cooked?”

余り焼いてほしくなければ “Rare”

普通に焼いてほしいならば “Medium”

じっくり焼いてほしいならば “Well-done” です。

この“done”は“do”の過去分詞で“する”“やる”の意味。

“well-done”は、ですから、『良—くやって (焼いて) くれ。』ということに
なります。

同じ“well-done”でも、うまく事が運んで言われた場合は、『良くやった

な！『上手いぞ。』という意味になります。

([Home](#) で戻る)

10. ^{州の名前} Surrey family of the Royslotts of Stoke Moran

“Surrey”はロンドンの南西に位置する州の名前。『州』とは言っても大ききから言えば、(アメリカの『州』というよりは) 日本の『県』みたいなものです。

“Royslotts of Stoke Moran” 日本で言えば、『近江の秦氏』とか『清和源氏』『村上源氏』(清和や村上は出身地ではありませんが)といった感じで、由緒のある家柄である、という風に理解すれば良いかと思います。現実に“Stoke Moran”という家系や地名があるわけではないようです。

([Home](#) で戻る)